

〈論文〉

ナチズム崩壊直後のシュタイナー学校の設置とその推進者たち — 1945年設置のマルブルク校を事例として —

遠藤孝夫

要約

Die Steiner Schule (Waldorfschule) hat 2019 ihr 100-jähriges Bestehen gefeiert und die Zahl der Schulen ist weltweit auf etwa 1.000 gestiegen (davon etwa 240 in Deutschland). Ich möchte die Aufmerksamkeit auf einige der fast unbekanntenen Persönlichkeiten lenken, die an der Gründung dieser Schulen beteiligt waren. Dieser Artikel untersucht die Biographien und Spuren derjenigen, die die Gründung der Steiner Schule in Marburg unmittelbar nach dem Zusammenbruch des Nationalsozialismus gefördert haben. Zwei Tage nach der Eroberung Marburgs durch die amerikanischen Truppen am 28. März 1945 begannen die Gespräche über die Einrichtung der Schule, und am 8. Oktober wurde die Marburger Schule eröffnet. Lisa de Boor, R. Goebel, H. Schwedes und W. Schuchhardt, die die Gründung dieser Schule leiteten, haben drei gemeinsame Merkmale. Erstens waren sie in ihrer Jugend den Ideen Rudolf Steiners zugetan und aktive Mitglieder der Anthroposophischen Gesellschaft und anderer Organisationen; zweitens überlebten sie die Nazizeit als die "geistigen Gegner" oder enge Freunde der aktiven Widerständler gegen Nationalsozialismus; und drittens waren sie Menschen, die unmittelbar nach dem Sturz des Naziregimes mit starkem Sendungsbewusstsein am Wiederaufbau der Jugenderziehung arbeiteten.

シュタイナー学校は2019年に創立100周年を迎え、学校数は全世界で約1千校(うちドイツに約240校)まで増加した。この学校の発展の礎となったほぼ無名の人物たちに注目したい。本稿では、ナチス・ドイツ崩壊直後、マルブルクのシュタイナー学校の設置を推進した人物たちの経歴や足跡を検討した。アメリカ軍がマルブルクを制圧した1945年3月28日の2日後には、学校設置に向けた協議が開始され、10月8日にマルブルク校は開校した。一連の学校設置を主導したリサ・デ・ボーア、R. ゲーベル、H. シュヴェーデス、W. シューハルトの4人には共通項が確認された。彼らは、第1に青年期にシュタイナー思想に傾倒し、人智学協会等の会員として活動したこと、第2にナチズムへの「精神的な反対派」ないし積極的抵抗者の親や親友としてナチス時代を生き延びたこと、第3にナチス崩壊直後より強い使命感から青少年教育の再建に奔走した人物であった。

キーワード

ナチズム シュタイナー学校 ルドルフ・シュタイナー 人智学 キリスト者共同体

はじめに

シュタイナー学校(本稿ではヴァルドルフ学校ではなく、原則としてシュタイナー学校と表記する)は、1919年9月、南ドイツの中心都市シュツットガルトのウーラントの丘に創設された(以下、シュツットガルト校と表記する)。2019年9月には創立100周年の節目を迎えたシュタイナー学校は、今や世界約80カ国に約1千校の姉妹校を数え、文字通り世界最大の学校運動へと発展している¹⁾。

では、何がこれほどのシュタイナー学校の発展を支えているのだろうか。第1に指摘すべきは、ルドルフ・シュタイナー(Rudolf Steiner, 1861-1925年)の人智学思想とそれを基盤とするシュタイナーの教育思想の存在であろう。シュタイナーの優れた教育思想が全世界に広がる学校運動の教育理念として根底を支えているからである。シュタイナー学校の教育実践を支えるシュタイナーの教育思想(特に人間認識と教育方法)に関しては、比較的研究が蓄積されている²⁾。

第2に指摘すべきことは、公立学校と同様に私立学校に対しても国家による厳格な管理統制が行われてきたドイツにおいて³⁾、第2次世界大戦以後、徐々に「私立学校の自由」(Privatschulfreiheit)の概念構築とその法的保障が整備されてきた事実である。教科書もテストも廃止し、校長も置かない学校運営という型破りな教育実践を行うシュタイナー学校が、ドイツで200校を超すまでに発展してきたことは、戦後ドイツにおける「私立学校の自由」を中核とする私立学校法制の整備・確立という外的条件を抜きには考えることができない。シュタイナー学校は、自らの教育実践を支える制度的基盤として「私立学校の自由」の法的保障の確立や公費助成制度の拡充運動の先頭となって闘ってきた。しかし、こうした事実は等閑視され、本格的研究はほぼ欠落している⁴⁾。

さらに、第3に指摘すべきことは、シュタイナーの人智学思想や教育思想に共鳴し、それを自らの信念として、具体的な社会実践活動に尽力した数多くの人々が存在するということである。1919年に創設された最初のシュタイナー学校については、シュタイナー自身の深い関わりに加え、実業家エミール・モルトや教師たち等、多くの人々が関わっていたことが知られている⁵⁾。しかし、その後にドイツの内外で設置されていったシュタイナー学校に関しては、設置準備や資金調達、学校当局との困難な交渉、そして設置後の学校運営に至るまで、多くの人々(教師達も含め)が尽力していたことは間違いないが、ゲーベル(Hana Göbel)の研究成果⁶⁾を除けば、ゲッテ(W.M.Götte)も指摘する通り⁷⁾、本格的研究は未開拓状態にある。とりわけ、1933年1月のヒトラーの権力掌握からナチズム崩壊後の戦後ドイツ再建期は、シュタイナー学校にとっても最も厳しい試練の時期であった。この過酷な時期にシュタイナー学校を支えた無名の人々が、現実社会との対峙の中で如何なる選択を行い、如何に生きたのかを歴史の底から掘り起こし、光を当てる作業は、シュタイナー学校運動史研究としても、またドイツ現代史研究としても重要な意味を持つものであると考えられる。

2 以上のような課題意識及び先行研究の状況を踏まえ、本稿はナチズム崩壊から半年足らずの1945年10月にドイツ中西部の学園都市マールブルクに設置・開設されたシュタイナー学校(Freie Waldorfschule Marburg、以下ではマールブルク校と表記する)を事例として、その設置と草創期の学校運営を推進した人々の経歴や足跡を可能な限り明らかにすることを課題とする。なお、マールブルク校の設置経緯に関する研究としては、前述のゲーベルの研究が唯一のものである。本稿では、このゲーベルの研究成果を踏まえつつも、マールブルク校発行の学校通信(Mitteilungen der Freien Waldorfschule Marburg)⁸⁾を含む一次資料を活用して分析を進め、マールブルク校の設置経緯とそれを推進した人々の実像に迫っていくこととする。

1. マールブルク校の前史 —ゼルター姉妹による私立学校—

マールブルクは、ドイツ中西部(ヘッセン州)に位置し、1527年創設のマールブルク大学(正式にはPhillips-Universität Marburg)のある大学都市(人口は約8万人)として知られる。このマールブルクには、1898年から小さな私立の女子中等学校(生徒数は約30人)が設置されていた。この学校の正式名称は不明であるが、ヨハンナ・ゼルター(Johanna Selter, 1865-1942年)が中心となって設置し、妹のアンナ・ゼルター(Anna Selter, 1872-1945年)が協力する形で運営していた学校で、「ゼルター学校」(Selter-Schule)と呼ばれていた。「マールブルクで極めて定評のある学校の一つだった」⁹⁾というゼルター学校は、1920年代になって大きな転機を迎えることになった。

フリードリヒ・リッテルマイヤー(Friedrich Rittelmeyer, 1872-1938年)を介してのシュタイナーの人智学および教育思想との邂逅である。F・リッテルマイヤーは福音派教会(プロテスタント)の牧師(説教師)として活動する中で、シュタイナーの人智学思想から強い影響を受けるようになり、シュタイナーの指導・助言の下に、宗教的改新運動を開始した神学者である¹⁰⁾。1922年9月、ドルナッハ(スイス)において、シュタイナーの立ち会いの下で、リッテルマイヤーが中心となって、「キリスト者共同体」(Christengemeinschaft)という、新たなキリスト教団体が設置された。その後、リッテルマイヤーはドイツ各地で精力的に講演活動を展開し、1923年5月9日と10日の両日、マールブルクにおいて講演会が開催された。

この1923年5月のリッテルマイヤーの講演会は、ゼルター学校を大きく変えることになった。リッテルマイヤーの講演を聞いたアンナ・ゼルターが、次いで姉のヨハンナ・ゼルターも、シュタイナーの人智学とそれに基づく教育思想に大きく感化され、最終的には自分たちが経営する学校にシュタイナー教育を導入することを目標とするに至った。ゼルター学校をシュタイナー学校へと転換するに当たっては、キリスト者共同体の司祭に叙階されて、1924年からマールブルクを拠点に活動していたロベルト・ゲーベル(Robert Goebel)、ゼルター姉妹と同様に1923年のリッテルマイヤーの講演に触発され、マールブルクにおけるキリスト者共同体運動の中心人物の一人となる女流作家リサ・デ・ボーア(Lisa de Boor, 1894-1957年)の二人が支援を行った。なお、後述するように、ロベルト・ゲーベルとリサ・デ・ボーアの両名は、1945年のマールブルク校の設置に尽力することになる。

自らの私立学校をシュタイナー学校へと転換するとのゼルター姉妹の目標の実現には、学校当局(プロイセン州文部省)及び「母なる学校」(Mutterschule)としてのシュツットガルト校(教師団)との協議が必要であった。またシュタイナー教育のための教室環境の整備のために、姉妹は多くの個人資産を抛出している。ヒトラーが権力を掌握した1933年1月以降、シュタイナー教育の実践には危険が伴う状況になったが、ゼルター姉妹は怯むことなく準備を続けた。特にシュタイナー教育の準備訓練を受けた教師を確保することが重要だったが、キリスト者共同体の若き司祭ロベルト・ゲーベルの尽力により、シュレグテンダル(Herta Schlegtendal, 1898-1981年)という女性教師を確保することができた。シュレグテンダルは、シュツットガルト校の教師団によって1928年から開始された独自のシュタイナー学校教師養成講座の履修者であり、同校の有名な女性教師ハイデブランド(Caroline von Heydebrand)の授業観察も行っていた人物であった¹¹⁾。なお、シュツットガルト校がナチ当局による弾圧を受け強制閉鎖となった時(1938年4月)、その閉校式にはシュレグテンダルがマールブルクのゼルター学校を代表して出席している¹²⁾。

ゼルター学校が、いつ正式にシュタイナー学校へと転換したのか、また学校当局(プロイセン州文部省)から私立学校としての設置認可が交付されたのか否かに関しては、今のところ資料的に確認ができ

ない。シュレグテンダルがゼルター学校に赴任したのは、1934年頃のことと推定されることから¹³⁾、ナチズム原理による学校教育の強制的同質化が開始された時期であることは間違いない。1933年4月に「職業官吏再建法」が制定されると、ユダヤ人のみならず、「政治的に信頼できない人物」(特に共産党、社会民主党员)も教職を罷免された。ゼルター学校には、こうしたナチ党局から政治的不適格者とされた公立学校の校長や教師たちも勤務していたという¹⁴⁾。

詳細は他稿に譲らざるを得ないが¹⁵⁾、1935年頃からナチス国家権力によるシュタイナー学校への弾圧が本格化していった。当時ドイツ国内に8校設置されていたシュタイナー学校と同様、ゼルター学校もまた、生徒数減少に伴う財政悪化が深刻化した。1938年12月のクリスマス月例祭までは辛うじて実施できたが、1939年1月31日付のナチ当局命令により、ゼルター学校は1939年3月23日に閉校処分された。ナチ当局による強制閉鎖を受けたゼルター学校の校舎は、そのままキリスト者共同体が引き継いだ。しかし、それもつかの間のことで、キリスト者共同体も約2年後の1941年7月25日付命令により、ヒムラーが指揮する秘密国家警察(ゲシュタポ)によって解散・活動禁止処分された。さらに、ゼルター姉妹の姉ヨハンナが1942年に病死し、妹のアンナも第2次世界大戦末期の1945年3月5日、連合軍による空爆で死亡している。

ゼルター学校は、これまでシュタイナー学校の歴史的展開の中に位置づけられることはなかった。ゼルター学校については、さらなる調査・確認を行うべき点が多く残されていることは言うまでもないが、第2次世界大戦の終了以前のドイツにあって、ゼルター学校がシュタイナー学校運動の一翼を担う学校であったことは間違いないだろう¹⁶⁾。

2. ドイツ敗戦直後の状況とマールブルク校の設置経緯

(1) ドイツ敗戦直後の状況

1939年9月1日、ドイツによるポーランド侵攻に始まるヨーロッパの第2次世界大戦は、1943年2月のスターリングラードでのドイツ軍の敗北以降、次第に連合国軍が優勢に転じた。1945年になると連合国軍はドイツ本土へと侵攻し、ドイツ軍は総崩れ状態となった。1945年4月30日、ヒトラーはソ連軍に包囲されたベルリンの総統官邸地下室で自殺し、その遺書で後継に指名されたデーニッツ(Karl Dönitz)が、5月8日にドイツを代表して連合国側に無条件降伏した。しかし、そのデーニッツを首班とする「ドイツ政府」(いわゆるフレンスブルク政府)も、5月23日にはデーニッツを含む主要閣僚が戦争犯罪者として逮捕されるに至り、ナチ統治体制は完全に崩壊した。無政府状態となったドイツ各地では、米ソ英仏の4連合国軍による占領統治が開始されていった。

4

敗戦直後のドイツ各地、特に主要都市は、戦時中から連合国軍による度重なる空爆攻撃と激しい市街戦により、主な建物は破壊され、文字通り廃墟と瓦礫の山と化し、後片付けでは多くの女性達、いわゆる「瓦礫の女」(Trümmerfrau)も動員された。住宅・電気・ガス・水道設備も破壊され、食料事情は極度に悪化、加えて東部の旧ドイツ占領地区からのドイツ人難民(約1千万人)の流入もあり、ドイツ国内は荒廃と混乱の極みだった¹⁷⁾。

しかし、ドイツ敗戦は、ナチズムの圧政に苦難の生活を強いられてきた人々にとっては、敗北としてよりも、むしろ「解放」と自由な活動の「解禁」を意味していた。ナチ当局から繰り返し弾圧を受け¹⁸⁾、子ども達への教育活動を断念せざるを得なくなっていたシュタイナー学校の教師や支援者たちも、解放感と使命感とに満ちて、ドイツ各地でシュタイナー学校の再建に向けて動き出したのである。

1937年8月に閉鎖となったベルリンのシュタイナー学校の教師だったヴァイセルト(Ernst Weissert)

によれば、ナチ当局から弾圧を受ける状況にあっても、「多くの父母、教師、支援者たちの希望的な思考は、より明るい未来へと向いていた。」、という。そして、将来的な学校再開の希望を持っていたシュタイナー学校の関係者は、学校が閉鎖された後も絶えず連絡を取り合うとともに、学校が再開される時に備えて、机や椅子、オリシュトミーの衣服などを地下室に保管していたという。彼らには、「運命が生き延びることを許すのであれば、生まれたばかりの、守るべき神聖なる未来の力である子どもたちのために、これからの全ての時間を捧げるという決心」が息づいていた¹⁹⁾、という。こうした大きな希望と強い使命感を抱いた人々によって、ナチズム崩壊直後の混乱と破壊の直中で、シュタイナー学校が再建されることになる。

ドイツ敗戦の年1945年、ドイツ国内では、廃墟と混乱の最中で6校のシュタイナー学校が再建された。このうち、シュツットガルト、ハノーファー、ドレスデン(旧東ドイツ地区)で再建されたシュタイナー学校は、いずれもナチ当局の弾圧を受けて閉校となっていたものを再開したものであり、残るテュービンゲン、マールブルク、エンゲルベルクの3校は新設である²⁰⁾。

(2) マールブルク校の設置経緯

ドイツ西部の学園都市マールブルクは、ドイツが最終的に敗戦を迎える約40日前の1945年3月28日、フランス側から侵攻してきたアメリカ軍により武力制圧された。時を同じくして、それまで政治的・文化的にも抑圧されてきた人々が、自由な精神生活の再建のために力強く立ち上がった。この状況について、マールブルク校の草創期の教師として活躍した人物が、10年後の1955年の時点で、以下のように回想している。

「物質的状况は常に重苦しい殺伐とした状況にあった。しかし、内面では、つまり人間の魂の点では、自由な何かが生まれていた。あらゆる恐怖を伴う戦争は終わった。戦争が破壊することなく残しておいた人間の魂は、新しい種まきを待ち焦がれていた。個々人の精神的自由と国家における自由な文化生活が長年にわたって拘束されてきた後で、今や至る場所で活気に満ちた精神的衝動が確認された。」²¹⁾

事実、マールブルクにおける「活気に満ちた精神的衝動」、すなわち精神的・文化的生活の再建に向けた動きは、アメリカ軍による制圧の2日後の3月30日から始まった。この日ナチ当局により1941年に活動禁止処分となっていた「キリスト者共同体」(Christiangemeinschaft)の生き残りの人々が早くも集会を開いている²²⁾。同時に、前述したゼルター姉妹の遺志を継承し、シュタイナー学校を設置するための最初の会合も持たれている。しかも、このキリスト者共同体の活動再開とシュタイナー学校の新設に向けた会合という2つの精神的・文化的運動の中心メンバーは同じ3人の人物、すなわち前述したりサ・デ・ボーア(Lisa de Boor)とロベルト・ゲーベル(Robert Goebel)、それとハンス・シュヴェーデス(Hans Schwedes)であった。この3人の経歴については後述することとし、まずはアメリカ軍のマールブルク制圧直後から開始されたシュタイナー学校の設置経緯を確認しておきたい。

りサ・デ・ボーア、R.ゲーベル、H.シュヴェーデスの3人は、ゼルター姉妹の遺志を継承し、マールブルクにシュタイナー学校を設置しようと会合を重ね、アメリカ軍政府との交渉も行った。シュタイナー学校の設置に関する交渉を担当したのは、アメリカ軍政府の教育・文化部門のベントレー大尉(Captain Bentley)だった。大尉は、シュタイナー学校の設置という文化的イニシアティブに対して、「開かれた耳を持ち、暖かな人間的共感を示した」²³⁾という。ベントレー大尉がシュタイナーの人智学思想にどれほどの理解があったかは不明である。しかし、ナチ当局により閉鎖させられた「ゼルター学校」を継承

し、シュタイナー学校を設置しようとする構想が、占領軍政府から好意的に評価されたことは間違いないだろう。加えて、学校設置を主導した一人であるシュヴェーデスが、アメリカ軍政府によりマールブルク市の視学(Stadtschulrat)に任命されたことも、学校の設置認可の取得を加速させる重要な背景となった。

学校設置に向けた軍政府との交渉と並行して、8月からは学校の設置母体となる学校協会(Schulverein)の設置準備、そして教師の確保の動きも本格化した。すなわち、8月中頃になって、後述するヴォルフガング・シューハルト(Wolfgang Schuchhardt)が新設予定のシュタイナー学校の教師となることが固まったことから、学校開設に向けた動きが一挙に加速した。1945年8月28日には、アメリカ軍政府から学校の設置認可が付与され、同時に学校の設立集会も開催された。この集会では、集会責任者の市視学シュヴェーデスが開会挨拶したのにつき、教師予定者であるシューハルトが、「何故にヴァルドルフ教育なのか？」と題する講演を行い、最後に学校協会を設置した。学校協会の理事会のメンバーには、最初から学校設置のために動いてきたH. シュヴェーデスとR. ゲーベルが加わり、理事会の議長にはナチズム期にベルリンのシュタイナー学校で会計管理の実務を担当した経験のあるレーデンベック(Eggerich Roedenbeck)が就任した²⁴⁾。この設置集会が開催された8月28日、「父母、教育権者および教育関係者へ」と題した学校設置広告文が公表されている。この広告文には、新たな学校設置の趣旨が以下のように記されていた。

「私立学校の新設は、そこで学ぶ子どもたちが、国家から干渉されることなく、自由な人間に向けて教育されるという意味で、人間学校(Menschenschule)を目標としている。この目標のために特に促進されるのは、芸術に方向づけられた教育方法である。」²⁵⁾

まさに、マールブルク校は、過酷なナチズム体制の崩壊の後で、「国家からの干渉」を受けることなく、芸術を重視した教育方法によって子ども達を「自由な人間」へと育成することを指導理念として設置された。1945年10月8日には、ナチズム崩壊後のマールブルク市において最も早く授業開始(開校)の日を迎えた。開校時の生徒数は96名、教師は指導的教師となったW. シューハルトに加え、前述したシュレグテンダル(Herta Schlegtendal)、ファルク(Karin von Falck)、ヴァイス(Meta Weiss)の4人であった²⁶⁾。

以上、マールブルク校の設置経緯を概観してきた。では、このマールブルク校の設置に向けたイニシアティブを発揮したリサ・デ・ボーア、R. ゲーベル、H. シュヴェーデス、そして草創期のマールブルク校の指導的教師W. シューハルト、この4人はいったいどのような経歴の持ち主だったのか、特にナチズムの時代をどのように生き抜いた人々だったのだろうか。以下、この4人の実像に迫ってみたい。

6

3. マールブルク校の設置と草創期に尽力した人々の実像

(1) リサ・デ・ボーア(Lisa de Boor, 1894-1957年)

まず、リサ・デ・ボーアから始めたい²⁷⁾。彼女は、1894年マールブルクの生まれで(結婚前の名前はElisabeth Hüttel)、父親は教師をしていた。実科学校を卒業した後、詳細は不明であるが、神智主義者の家庭で家事手伝いを始めている。この経験は彼女が後にシュタイナーの人智学思想に傾倒する背景の1つだった可能性はある。程なく18歳の時(1912年頃)、職業軍人のヴォルフガング・デ・ボーア(Wolfgang de Boor)と結婚した。夫のヴォルフガングは健康上の理由から早期に退役し、法律家として活躍した人物である。

第1次世界大戦末期の1918年以降の数年間、バルト海に面した地の芸術家コロニー(生活共同体)に滞在している。彼女が滞在したという芸術家コロニーの詳細は分からないが、20世紀への転換期に興隆した、物質文明への危機意識を根底に、宗教・芸術・食生活・建築・教育等の広範な人間生活領域において「生」本来の在り方への回帰を志向した運動、いわゆる「生改革運動」(Lebensreformbewegung)²⁸⁾と密接な関連性を持つものであったことは間違いないだろう。約4年後の1922年、芸術家コロニーからマールブルクに戻った彼女は、ドイツ第二帝政の崩壊とその後の混乱の中で、女性の地位向上団体や1920年に設置された市民大学(Volkshochschule)の理事会等での社会活動に従事し、同時に抒情詩や小説等の作家としての活動も開始した。

その矢先、彼女に大きな転機が訪れた。F.リッテルマイヤーの講演会を契機とするシュタイナー思想との邂逅である。前述の通り、ゼルター姉妹がシュタイナーの人智学とその教育思想に傾倒する契機となったのも、この1923年5月のマールブルクでのF.リッテルマイヤーの講演会であった。同じ講演会にリサ・デ・ボーアも参加していたのであった。この講演会を契機として、リサ・デ・ボーアもゼルター姉妹同様に、シュタイナーの人智学思想に深く傾向し、宗教改新運動組織「キリスト者共同体」の担い手として活動することになる。1924年には、早くもリサ・デ・ボーアの自宅において、キリスト者共同体のマールブルク教会の設置儀式が行われた。この儀式は、司祭に叙階されたばかりのR.ゲーベルが中心となり実施された。ゼルター姉妹も同席していたものと推測される。事実、上述した通り、リサ・デ・ボーアとR.ゲーベルはゼルター姉妹を支援し、ゼルター学校のシュタイナー学校化を推進した。リサ・デ・ボーアは1927年に人智学協会の会員となった。またゼルター学校では、キリスト者共同体の礼拝が、ナチ当局から禁止命令を受ける1941年まで行われていた。

もう一点確認しておくべきことは、リサ・デ・ボーアがナチズム時代をどのように生きたのかということである。この点を確認できる資料は極めて限られているが、ここでは「オーバー・ヘッセン新聞」(Oberhessische Presse)に掲載されたリサ・デ・ボーアに関する記事(筆者はMarkus Bauer)²⁹⁾を手がかりにし、また彼女の死後に刊行された日記³⁰⁾も確認しつつ検討したい。

リサ・デ・ボーアがマールブルクにおける人智学思想の社会実践運動の推進者として活動を開始した1924年頃、一人の若き哲学者が彼女の家で下宿人として一緒に生活を始めた。カール・レーヴィット(Karl Löwith, 1897-1973年)である。当時彼は、博士論文を書き上げたばかりで、恩師ハイデガーが1923年にフライブルク大学からマールブルク大学に移ったことから、後を追うようにマールブルク大学私講師の職を得た。レーヴィットが住居としたのはリサ・デ・ボーアの邸宅だった。家主のリサ・デ・ボーアと借主となったレーヴィットが深い信頼関係を構築していたことは、ヒトラーの政権掌握後に、ユダヤ人であるレーヴィットが避難先としたローマまで訪問している事実からも知ることができる。1938年11月9日未明のいわゆる「水晶の夜」の直後の日記で、リサ・デ・ボーアは、「暗黒の運命が始まる。」(11月9日)、「あらゆる都市で、シナゴークが放火されユダヤ人商店が遊撃を受け、ユダヤ人が虐待されている。「突然に」起こったように見えるが、1933年から何と多くの出来事があったことか。」(11月10日)³¹⁾、とヒトラーの政権奪取以降、ユダヤ人への抑圧が着実に進行してきた事実を的確に記述していた。

なお、レーヴィットはその後、日本へと避難して、1936年から東北帝国大学教授として教鞭を執るが、太平洋戦争が始まった1941年にはアメリカへと亡命している。こうしたナチズムによる迫害からの避難と亡命生活を続ける間も、レーヴィットとリサ・デ・ボーアは手紙で連絡を取り続けた。レーヴィットは、リサ・デ・ボーアについて、「1933年以降、信頼と共感と親切さを持って、暗い日々を私たちと同伴してくれた」、と総括するとともに、次のようにも述べている。

「私は、デ・ボーア夫人に対して、思慮深い友好関係と心からの親交とを抱いた。私の妻も同様だった。夫人は人智学のキリスト者共同体の熱心な会員であった。しかし、それは血の通わない、天上的な関わり方ではなく、もっと地に足の着いた、共同体にとって有益な役割を果たし、先入観を持たない関わり方ができる人間という意味においてである。彼女は何よりも一人の人間だった。」³²⁾

このレーヴィットの記述からは、ナチズムの台頭に伴ってユダヤ人への迫害が日増しに強まる状況にあって、リサ・デ・ボーアがナチズム政策に背を向けて、終始レーヴィットとその家族を支援し続けてくれたことへの深い感謝の念を読み取ることができる。リサ・デ・ボーアの日記にも、「本日、最後に残っていたユダヤ人がマールブルクから消え去った。モーゼの3人の兄弟の長いこと見慣れた姿が、修道士の門から消えた。ダビデの星が沈む。全てのことがまったく不気味なことだ。」(1942年5月27-29日)³³⁾と記されている。この記述からも、迫害されるユダヤ人全体に対するリサ・デ・ボーアの強い贖罪の念とナチズムへ強烈な憤りを確認することができる。

リサ・デ・ボーアは、積極的な反ナチ抵抗活動を行った事実は確認できないが、ナチズムの非人間的本性を見抜き、ナチズムへの明確な拒否の姿勢を貫いた数少ないドイツ人の一人だったことは確かである。彼女の家が「多くの反ナチ抵抗者たちの会合の場所」であったとする指摘があるが³⁴⁾、詳細は未確認である。ただ、彼女が1941年7月にゲシュタポ(秘密国家警察)により逮捕され、数日後に保護観察付きで釈放されたことは確認されており、少なくとも彼女がナチズムへの「精神的反対派」(マルクス・バウアーによる評価)であったことは間違いない。また、彼女の娘で、ハンブルクで小児科医として勤務していたウルスラ・デ・ボーア(Ursula de Boor, 1915-2001年)は、当地の反ナチ抵抗組織(ミュンヘンの白バラグループと連携していた candidates of humanity、別名 Weisse Rose Hamburg)に関係していたことから、1943年12月にゲシュタポに逮捕されている。その後ウルスラ・デ・ボーアは、1945年4月に侵攻してきたアメリカ軍に解放されるまでの約2年間、5カ所の刑務所等の施設で、過酷な拘禁状態に置かれた。上述の通り、リサ・デ・ボーアが、マールブルクがアメリカ軍により制圧された直後に、キリスト者共同体の再開とシュタイナー学校の設置に向けて活動を開始した時点では、自分の娘の生死も判然としない不安な時期であったことになる。シュタイナー学校の設置に奔走したリサ・デ・ボーアのナチズムへの強い拒絶姿勢を物語るものとして、以下の回想(マールブルク校の草創期の中心教師 W. シューハルトによる)が残されている。

「リサ・デ・ボーアは、我々との会合において、大いなる真剣さと責任感から、次のことを常に繰り返して語っていた。すなわち、私たちは、学校と学校協会における責任ある仕事のためには、完全に潔白である人物、つまり壊滅された政府(ナチズム政権)と妥協したことがなく、また占領軍政府に直ちに適任者として提案することができる人物のみしか協力してもらえないのだ、ということである。」³⁵⁾

8

なお、リサ・デ・ボーアは、共産党系を含む超党派の人々で構成された女性の地位向上組織で活躍するとともに、市民大学の再建活動にも従事し、ナチズム崩壊後のマールブルクの精神・文化活動の振興にも尽力した。

(2) ロベルト・ゲーベル(Robert Goebel, 1900-83年)とハンス・シュヴェーデス(Hans Schwedes, 1895-1965年)

次に、アメリカ軍のマールブルク制圧直後から、リサ・デ・ボーアと一緒に活動を開始した2人の人

物、ロベルト・ゲーベルとハンス・シュヴェーデスについて、限られた資料からではあるが確認できたことをまとめてみよう。

まず、R.ゲーベルは、キリスト者共同体の司祭として、ナチズムが台頭する以前からマールブルクで活動していた人物である。ゲーベルの経歴で判明していることは以下の通りである³⁶⁾。彼は、パリで裕福な実業家のドイツ人家庭に生まれ、第1次世界大戦勃発に伴い家族はドイツ(フランクフルト・アム・マイン)に移住した。神学を学んでいた20歳の時にシュタイナーの人智学との出会いがあった。21歳から学んだテュービンゲン大学時代に本格的に人智学に傾倒すると共に、後のキリスト者共同体の共同創立者たちとも邂逅している。1921年秋にドルナッハで開催されたシュタイナーによる神学者向け講座にも参加し、さらに1923年12月には、キリスト者共同体の代表F.リッテルマイヤーによって司祭に叙階されている。続いて、彼は年若い司祭としてマールブルクに赴任したが、このことは、F.リッテルマイヤーのマールブルクでの講演会(1923年5月)を契機に、シュタイナー人智学に傾倒したゼルター姉妹とリサ・デ・ボーアからの司祭派遣要請に応じたものであろうことは想像に難くない。実際、1924年7月、R.ゲーベルが司祭として、キリスト者共同体のマールブルク教会設置の儀式を行った場所は、リサ・デ・ボーアの自宅であった。

以後、R.ゲーベルはリサ・デ・ボーアと協力して、ゼルター学校のシュタイナー学校化に尽力したことは前述の通りである。その後、彼はキリスト者共同体の司祭として精力的に活動していたが、キリスト者共同体の活動は1941年6月からナチ当局(ゲシュタポ)による弾圧を受け、同年7月25日には親衛隊長官ヒムラーにより解散と活動禁止命令を受けた³⁷⁾。以後、ゲーベルはキリスト者共同体の司祭としての活動ができない苦難の時期を耐える必要があったが、1945年3月末、アメリカ軍のマールブルク制圧の2日後には、リサ・デ・ボーアらと活動を再開し、シュタイナー学校の設置に向けた準備にも奔走していった。

一方、H.シュヴェーデス(Hans Schwedes)は、シュタイナーの人智学思想を基盤とする学校教育の専門家の立場から、マールブルクにおけるシュタイナー学校の設置に貢献した人物であった³⁸⁾。彼は第1次世界大戦に従軍していた際に、自らの人生の指針となる思想としてシュタイナーの人智学思想に出会っている。第1次世界大戦後には、シュタイナーと個人的に面会するほどに傾倒し、シュタイナーの社会三層化論を実践する運動に熱心に従事した。1923年には、人智学協会とキリスト者共同体の会員となった。しかし、1933年1月にヒトラーが政権を掌握すると、同年4月に制定された「職業官吏再建法」により、彼は学校(学校種の詳細は不明)の教員を罷免された。社会民主党(SPD) 党员であったことが罷免の理由であった。

教職を罷免された後のシュヴェーデスがどのような生活状態となったかについては、残念ながら信頼できる資料が欠けている。ただ彼がナチ当局から敵視され解散命令を受けた社会民主党と人智学協会の両組織に所属していたことからすれば、彼とその家族が、ナチズム体制下で辛酸をなめる生活を送ったであろうことは間違いない。分かっている事実として、第2次世界大戦末期となる1944年の時点で、シュヴェーデスとその家族は、フランクフルト・アム・マインで生活していた。ただ、連合国軍による空爆が激しくなったことから、まず妻と娘が1944年中にマールブルクへと疎開し、さらに1945年始めにシュヴェーデス自身も妻子の待つマールブルクに来ている。シュヴェーデス一家がマールブルクで身を寄せた家は、リサ・デ・ボーアの邸宅の隣であった。この事実は、禁止・解散命令を受けた人智学協会及びキリスト者共同体の関係者たちは、過酷な生活の中でも相互に連絡を取り合い、いわば人的なネットワークを形成していたことが推察される。

こうして、アメリカ軍によりマールブルクが武力制圧された2日後(1945年3月30日)に、リサ・

デ・ボーア、ゲーベル、そしてシュヴェーデス等が中心となって会合が持たれ、シュタイナー学校の設置の動きが開始したことは前述の通りである。シュヴェーデスはさらに、1945年4月頃と推定されるが、アメリカ軍政府によってマールブルクの市視学(Stadtschulrat)に任命された。シュヴェーデスがマールブルクの教育行政を統括する市視学という重要な地位に就任したことは、上述した通り、シュタイナー学校の設置を加速させることとなった。彼はマールブルク校の設置に尽力した後、1949年にはヘッセン州南部の小都市グロス・ゲラウ(Gross-Gerau)の視学へと異動した。異動早々から彼は、当地の市民大学(Volkshochschule)の設置(1949年)の主導的役割を果たし、1961年まで市民大学の理事会議長も務めた。

(3) ヴォルフガング・シューハルト(Wolfgang Schuchhardt, 1903-1993年)

最後に、マールブルクにおけるシュタイナー学校の設置後の最も困難な草創期に尽力した人物である、W.シューハルトの経歴及び人物像を確認してみよう³⁹⁾。シューハルトは、上述した3人が開始したマールブルク校の設置運動に8月頃から合流し、同10月に学校が開校されると、実質的な「校長」として草創期を支えた教育者である。

シューハルトは、1903年、考古学者を父としてハノーファーで生まれ、1922年からマールブルク大学、ゲッティンゲン大学及びベルリン大学において、主にドイツ文学と文化史を専攻した。マールブルク大学で過ごした期間は、1922年から1923年までの3セメスター期間であったが、この期間にその後の生き方を方向づけることになる2つの重要な出来事があった。一つは、人智学及びキリスト者共同体の思想との出会い、もう一つはアドルフ・ライヒヴァイン(Adolf Reichwein, 1898-1944年)との出会いであった。

まず、人智学及びキリスト者共同体との出会いであるが、それは奇しくも上述したゼルター姉妹やリサ・デ・ボーアの場合と同じだった。1923年5月のマールブルクで行われたリッテルマイヤーの講演会を契機として、シューハルトもまた人智主義者となり、1945年設置のマールブルク校の教師となる生き方を方向づけることとなった。1923年冬学期からゲッティンゲン大学に移ったシューハルトは、本格的にシュタイナーの著作とその思想の研究に没頭し、1924年にはキリスト者共同体の青年会議に参加するとともに、人智学協会の会員になっている。1926年には、北ドイツのロストック大学において、17世紀の作家グリムメルスハウゼンの文体に関する研究で哲学博士号を取得した。続けて、1928年には中等学校教師の国家資格も取得したが、それはシュタイナー学校の教師になるとの目標を実現するためであった。

事実、シューハルトは1928年から、生まれ故郷であるハノーファーのシュタイナー学校(Freie Waldorfschule Hannover, 1926年開設)の担任教師となっている。ただ、この時のシュタイナー学校教師としての最初の勤務は、1932年までの約4年で一旦は終止符が打たれている。詳細は不明であるが、ヤコビの解説を参考にすれば⁴⁰⁾、シュタイナーの感動的な教育思想を低学年の生徒への教育実践として具体化することに困難さがあったと推察される。その後、シューハルトは1933年から、応召により海軍勤務となる1943年までの約10年間、ベルリンの国立民族学博物館に勤務した。

ここで、もう一つのアドルフ・ライヒヴァインとの出会いについて確認してみよう。ライヒヴァインはシューハルトより5歳年上で、1920年からの2セメスターをマールブルク大学で学んでいた時に、熱心に大学クラブ(学生組合)の活動を行い、大学の民主化運動で活躍した。1921年に哲学博士号を取得し、成人教育の推進者となったライヒヴァインは、その後もマールブルク大学クラブとは連絡を保ち、意見交換の機会も持っていた。1922年にマールブルク大学に入学したシューハルトは、この大学クラ

ブの活動を通してライヒヴァインと出会い、生涯にわたる友好関係を築くことになる⁴¹⁾。

ライヒヴァインはイエナ市民大学の事務局長を長く務めたのち、プロイセン州文部省広報室長及び文相カール・ハインリヒ・ベッカーの秘書を経て、自らも創設に参画して設置されたハレの教育アカデミー(2年制の大学レベルの初等学校教員養成機関)の教授に就任した。ところが、折しも1933年1月にヒトラーが首相に就任すると、先に検討したH.シュヴェーデスと同様に、ライヒヴァインはハレ教育アカデミーの教授職を罷免された。ライヒヴァインには、トルコのイスタンブール大学教授職を選択する可能性もあったが、敢えてドイツに止まり、ベルリン郊外の寒村ティーフェンゼーの単級国民学校の教師となる道を選択した。ライヒヴァインは、ナチズム教育が強要される過酷な状況にあって、ティーフェンゼーの子どもたちに、ヒトラーとナチズムに安易に盲従しない「主体的自己」の育成を主眼とする教育を実践していた。つまり彼の教育実践は、巧妙にカムフラージュされた、ナチズム体制への「教育的抵抗」を意味していた⁴²⁾。

ただ、ティーフェンゼー小学校におけるライヒヴァインの教育実践は、約5年半で終止符が打たれる。第2次世界大戦直前の1939年5月、ライヒヴァインはベルリンの国立民族学博物館の勤務となったからである。このライヒヴァインの異動には、マールブルク大学以来の親友であるシューハルトが深く関与していた。同博物館では、学校教育との連携を強化する目的から、担当部署となる「学校と博物館」部門を新設することになり、その部長職の人選が課題となった際に、同博物館勤務となっていたシューハルトが即座にライヒヴァインを推挙し、それが実現したからである⁴³⁾。以後、ライヒヴァインは、博物館教育という新たな領域の先駆者として尽力するが、それは表向きのことであって、同時に彼は秘密裏に、戦争への道を突き進むナチズム体制の暴走を食い止める政治的行動に邁進していった。より具体的には、ライヒヴァインは、1940年初頭に発足したとされる、H.J.モルトケ(1907-45年)を中心とする反ナチ抵抗集団「クライザウ・サークル」の中核的メンバーとして、多様な反ナチ抵抗グループ(ヒトラーの暗殺実行グループも含む)と連携しつつ、戦後構想づくりにおいて重要な役割を果たした。しかし、その過程で、ライヒヴァインは1944年7月4日、ゲシュタポによって逮捕され、同年10月20日、民族裁判所で死刑判決を言い渡され、即日執行されている。

シューハルトとライヒヴァインは、1939年5月から国立民族学博物館の同僚となり、それまで以上に親密な交友関係となった。ライヒヴァインがゲシュタポに逮捕された1944年7月4日当日も2人は会い、政治的状況について会話していた。その際のライヒヴァインの最後の言葉は、自身に迫る官憲の動きを察知していたかのように、「何かが起こりつつある。」だったという⁴⁴⁾。シューハルト自身は、ライヒヴァインが参加していた反ナチ抵抗グループ「クライザウ・サークル」のメンバーではなかった。しかし、1941年から42年にかけての連続14日間、シューハルトは、ライヒヴァイン、同じく「クライザウ・サークル」に属していたカール・フォン・トロータ(Carl Dietrich von Trotha, 1907-52年)を含む5人で会合を持ち、政治・軍事情勢について集中討議を行っていた⁴⁵⁾。また、シューハルトは、1943年4月からの海軍勤務の傍ら教授資格論文の執筆に取り組み始め、翌44年3月に完成させているが、論文内容を確認したシトコによれば⁴⁶⁾、ドイツの民俗学に関する彼のこの論文には、当時のいわば常識となっていたナチズムの「血と土」イデオロギーに依拠した記述は皆無となっている。こうした事実を踏まえれば、シューハルトは、ライヒヴァインに代表される積極的な反ナチ抵抗運動の担い手ではなかったものの、リサ・デ・ボーアと同様、「反ナチス」の思想的立場にあったことは間違いないだろう。

さて、バルト海の海軍施設での勤務中にドイツ敗戦を迎えたシューハルトは、収容所から解放された1945年6月、妻子が待つヘッセン州北部の小都市アロルゼンに復員した。約2ヶ月後の同年8月初旬、シューハルトはマールブルクにおけるシュタイナー学校の設置計画を知ることになる、上述した通り、

マールブルクで学校設置に奔走していたゲーベルとシュヴェーデスの2人から、設置予定のシュタイナー学校の教師になることの打診を受けたことによる。シューハルトへの打診の詳しい経緯は明らかではないが、ここでもナチ当局から禁止処分された人智学協会及びキリスト者共同体の関係者のネットワークが背景にあったことは確かだろう。続いて8月中旬、シューハルトはマールブルクに出向き、ゲーベル、シュヴェーデス、リサ・デ・ボーアの3人と具体的な協議の機会を持っている。実は、同じ時期に、シューハルトはマールブルク大学の民俗学教授のポストも提供されていた。結果的に、シューハルトは、約1年前に刑死となった親友ライヒヴァインが、1933年に国外の大学教授職ではなく、敢えて国民学校教師の道を選択したように、新設されるマールブルク校の教師となることを選択した。そして、前述の通り、シューハルトは、学校の設置認可が付与された8月28日に開催された学校設立集会において、新設される学校の教師を代表する形で「何故にヴァルドルフ教育なのか？」と題して講演を行っているのである。

ナチズム崩壊直後の荒廃と混乱の直中で、シューハルトが如何なる思いで新設される私立学校の教師となることを決断したのかは、それから10年後、シューハルトが当時を回想した以下の文章から読み取ることができる。この文章からは、ナチズム教育と悲惨な戦争により荒廃したドイツの青少年を教育すること、しかも「国家からの干渉」を排除して、芸術に満たされたシュタイナー教育を実践することに、自らの後半生を捧げようとした情熱をと強い使命感を読み取ることができよう。

「第2次世界大戦は比類なき廃墟をもたらした。わが民族は、その文化的生活と法的状況と経済の完全なる破局の状態にあった。新たな始まりは探求されなければならなかった。青少年は自分たちを取り囲む崩壊状態には何の罪もないが、やがて来ることになる苦悩とあらゆる領域における再建という将来の仕事のめに、最も重い負担を課せられている存在である。こうした青少年のために、新たな教育の道が開拓されなければならなかった。この時点で私たちが捉えていた思いはこうしたことだった。」⁴⁷⁾

おわりに

以上、ナチズム崩壊直後の1945年10月、公立学校に先だって授業を提供したマールブルクのシュタイナー学校を事例に、その設置経緯とそれを推進した4人の人物(リサ・デ・ボーア、ロベルト・ゲーベル、ハンス・シュヴェーデス、ヴォルフガング・シューハルト)について検討してきた。検討の結果、ドイツ敗戦後の混乱の中であって、シュタイナー学校の設置に尽力した4人には、いくつかの共通点を確認することができた。それを摘記してまとめたい。

12 まず第1に、彼らはいずれも青年期にシュタイナーの人智学思想に傾倒し、人智学協会ないしキリスト者共同体の会員となっていた人物であった。しかも、彼らをシュタイナー思想へと誘ったのは、キリスト者共同体の代表を務めていた聖職者フリードリヒ・リッテルマイヤーであったことも共通していた。

第2に、彼らは、活動していた組織(人智学協会、キリスト者共同体)がナチズム権力により弾圧を受け、最後には禁止・解散処分を受けたこともあり、ナチズムの12年間は自らの信念とする社会活動の展開を封じられていた。彼らは、ライヒヴァインのような積極的な反ナチ抵抗活動者ではなかったが、少なくとも「精神的な反対派」として、ないしは積極的反ナチ活動者の身近でナチズム時代を生き延びた人物たちであった。

そして第3に、彼ら4人はいずれも、ナチス・ドイツ崩壊直後から、次代を担う青少年の教育活動の再建に強い使命感を持って従事した人物たちであった。彼らの強い信念に支えられた行動により、マー

ルブルク校は設置されたと言える。なお、リサ・デ・ボーアとハンス・シュヴェーデスについては、シュタイナー学校の再建に止まらず、成人教育の場としての市民大学の再建や女性の社会的地位向上のための活動も確認することができた。その詳細の検討は別の機会としたい。

〈付記〉

本稿は教育史学会第64回大会(2020年9月27日)及びフォーラム・ドイツの教育第85回(2021年5月29日)における研究発表に加筆・修正したものであり、また科学研究費補助金(基盤C、18K02355、代表者:遠藤孝夫)及び科学研究費補助金(基盤C、19K02419、代表者:岡典子)による研究成果の一部である。

注

- 1) さしあたり、次を参照のこと。広瀬俊雄・遠藤孝夫・池内耕作・広瀬綾子編『シュタイナー教育100年 80カ国の人々を魅了する教育の宝庫』昭和堂、2020年。
- 2) シュタイナーの教育思想に関しては、多くの研究書が上梓されている。代表的な文献は次の通り。広瀬俊雄『シュタイナーの人間観と教育方法』ミネルヴァ書房、1988年、柴田英樹『シュタイナーの教育思想: その人間観と芸術論』勁草書房、2011年、吉田武男『シュタイナーの人間形成論 道德教育の転換を求めて』学文社、2008年、河野桃子『シュタイナーの思想とホリスティックな知』勁草書房、2021年。なお、「人智学」(Anthroposophie)は、ルドルフ・シュタイナー(1861-1925年)によって確立された、人間および世界に宿る精神性(霊性)の認識を課題とする思想体系であり、その思想は教育(シュタイナー学校)のみならず、芸術、宗教、医療、建築、農業などの様々な社会実践運動として世界規模で具体化されている。福音派(プロテスタント)聖職者であったF.リッテルマイヤーが、シュタイナーの支援を受けて、1922年に設立したキリスト教改新組織が「キリスト者共同体」(Christengemeinschaft)である。
- 3) さしあたり、次を参照のこと。拙著『管理から自律へ 戦後ドイツの学校改革』勁草書房、2004年。特に第1章。
- 4) この観点に関しては、筆者が継続的に研究を行ってきた。主な成果は次の通り。拙稿「シュタイナー学校の公的承認をめぐる100年の闘い」、広瀬・遠藤・池内・広瀬編『シュタイナー教育100年』前掲書所収、拙稿「戦後ドイツにおけるヴァルドルフ学校の再建と『私立学校を設置する権利』」、『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第18号(2019年)、拙稿「ヴァルドルフ教員養成の公的地位獲得と教員養成の国家独占の否定」、日本教育学会編『教育学研究』第80巻1号(2013年)。
- 5) 1919年創設の最初のシュタイナー学校の設置に関わった人々に関しては、次を参照のこと。Albrecht Schmelzer, *Die Dreigliederungsbewegung 1919. Rudolf Steiners Einsatz für den Selbstverwaltungsimpuls*, Verlag Freies Geistesleben, 1991.
- 6) Hana Göbel, *Die Waldorfschule und ihre Menschen Geschichte und Geschichten 1919 bis 2019*, 3 Bände, Verlag Freies Geistesleben, 2019.
- 7) Wenzel M. Götte, *Erfahrungen mit Schulautonomie Das Beispiel der Freien Waldorfschulen*, Verlag Freies Geistesleben, 2006, S.575.
- 8) マールブルク校発行の学校通信(Mitteilungen der Freien Waldorfschule Marburg)は、同校の卒業生であり、また同校で長く教鞭を執っていた(1970-2002年の期間)カールシュ女史(Friederun Christa Karsch)のご厚意により提供を受けたものである。記して謝意を表したい。
- 9) Hana Göbel, a.a.O., Band 1., S. 408. ゼルター学校に関しては次も参照した。Herta Schlegtendal, Zur Vorgeschichte der Marburger Waldorfschule, In: *Mitteilungen der Freien Waldorfschule Marburg*, Nr.60, 1979, S.14-25, Wolfgang Schuchhardt, Gründung und zehn Jahre Entwicklung unserer Schule, In: *Mitteilungen der Freien Waldorfschule Marburg*, Doppelheft 4/5, Herbst 1955, S.3-9.

- 10) F. リッテルマイヤーについては、主として次の文献を参照した。Gerhard Wehr, *Friedrich Rittelmeyer Sein Leben – Religiöse Erneuerung als Brückenschlag*, Urachhaus, 1998, Lothar Gassmann, *Anthroposophie und Christentum. Band 1: Biographisches Leben und Werk von Rudolf Steiner, Friedrich Rittelmeyer, Emil Bock und Rudolf Frieling*, Fromm Verlag, 2011.
- 11) Hanna Göbel, *a.a.O.*, Band 1., S. 408.
- 12) Herta Schlegtendal, Zur Vorgeschichte der Marburger Waldorfschule, In: *Mitteilungen der Freien Waldorfschule Marburg*, Nr.60, 1979, S.16.
- 13) シュレグテンダルがゼルター学校に赴任した時期に関して、ハナ・ゲーベルは1933年と記載しているが、注9)に挙げた他の複数の資料では1934年と記している。
- 14) Hana Göbel, *a.a.O.*, Band 1., S. 409.
- 15) 拙稿「ナチズム体制下におけるヴァルドルフ学校の基礎的研究」、『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第16号(2017年)。
- 16) Hana Göbel, *a.a.O.*, Band 1., S. 409.
- 17) ナチズム崩壊直後のドイツの状況に関しては、主として次を参照した。H・A・ヴィクラー(後藤、奥田、中谷、野田訳)『自由と統一への長い道Ⅱ ドイツ近現代史1933-1990年』昭和堂、2008年、川喜田敦子『東欧からのドイツ人の「追放」20世紀の住民移動の歴史のなかで』白水社、2019年。
- 18) 詳細は割愛するが、シュタイナー学校の閉鎖に加え、強制収容所で死亡した教師や処刑された教師、殺されないまでも逮捕・拘禁された教師も多い。Volker Frielingsdorf, *Geschichte der Waldorfpädagogik, Von ihrem Ursprung bis zur Gegenwart*, Beltz Verlag, 2019, S.180-182.
- 19) Weissert, Ernst, Was sagt ihr uns vom Menschen?, In: *Erziehungskunst*, Heft 11, 1955, S.321-327.
- 20) レーバー及びゲッテの研究書は、ハンブルク(ヴァンズベク)のシュタイナー学校の再開時期を1945年としているが、1946年の事実誤認である。従って、これらの文献に基づいて執筆した次の拙稿の記述も訂正が必要となる。Stefan Leber, *Die Waldorfschule im gesellschaftlichen Umfeld*, 1981, S.16, Wenzel M. Götte, *a.a.O.*, Anhang, 拙稿「戦後ドイツにおけるヴァルドルフ学校の再建と『私立学校を設置する権利』」、前掲論文。
- 21) Wolfgang Schuchhardt, Gründung und zehn Jahre Entwicklung unserer Schule, In: *Mitteilungen der Freien Waldorfschule Marburg*, Doppelheft 4/5, Herbst 1955, S.3.
- 22) *Forschungsstelle Kulturimpuls- Biographien Dokumentation* (Robert Goebel), Robert Goebel, Die Christengemeinschaft in Marburg, Wiederbegründung 1945, https://christengemeinschaft.org/marburg/html/geschichte_wiederbegruendung.htm (abgerufen am 10. 05. 2021)
- 23) Wolfgang Schuchhardt, Lisa de Boor und die Freie Waldorfschule Marburg, In: *Mitteilungen der Freien Waldorfschule Marburg*, Nr.40 (Sommer 1964), S.3.
- 24) *Ibid.*, S.4.
- 25) An die Eltern, Erziehungsberechtigten und pädagogisch Interessierte vom 28.08.1945.
- 14 26) Wolfgang Schuchhardt, Aus der Gründungszeit unserer Schule, In: *Mitteilungen der Freien Waldorfschule Marburg*, Nr.60, 1979, S.12.
- 27) 主に次の文献を参照した。Wolfgang Schuchhardt, Lisa de Boor und die Freie Waldorfschule Marburg, In: *Mitteilungen der Freien Waldorfschule Marburg*, Nr.40 (Sommer 1964), Robert Goebel, Lisa de Boor Eine Skizze von Leben und Werk, In: *Mitteilungen der Freien Waldorfschule Marburg*, Nr.40 (Sommer 1964).
- 28) さしあたり次を参照のこと。竹中亨『帰依する世紀末 ドイツ近代の原理主義者群像』(ミネルヴァ書房、2004年)、上山安敏『世紀末ドイツの若者』(講談社学術文庫、1994年)。
- 29) Markus Bauer, Lisa de Boor: Lange Jahre und bange Tage einer Schriftstellerin, In: *Oberhessische Presse*, 11.September 1989. リサ・デ・ボーアに関する記述は、特に断りがない限り、この新聞記事を参照した。

なお、この新聞記事はマールブルク校の元教師Friederun Christa Karsch女史から提供されたものである。

- 30) Lisa de Boor, *Tagebuchblätter aus den Jahren 1938-1945*, Biederstein Verlag, 1963.
- 31) *Ibid.*, S. 11.
- 32) Karl Löwith, *Mein Leben in Deutschland vor und nach 1933. Ein Bericht*, Fischer Taschenbuch Verlag 1989, S.64.
邦訳書『ナチズムと私の生活』(秋間 実訳、法政大学出版局、1990年)も参照したが(該当箇所は104-105頁)、訳文は独自のものである。
- 33) Lisa de Boor, *Tagebuchblätter aus den Jahren 1938-1945, a.a.O.*, S.108.
- 34) Wolfgang Schuchhardt, *Aus der Gründungszeit unserer Schule, a.a.O.*, S.11.
- 35) Wolfgang Schuchhardt, *Lisa de Boor und die Freie Waldorfschule Marburg, a.a.O.*, 4.
- 36) 主として、次の資料を参照した。Johannes Lenz, Robert Goebel, In: *Forschungsstelle Kulturimpuls – Biographien Dokumentation*.
- 37) Uwe Werner, *Anthroposophen in der Zeit des Nationalsozialismus (1933-1945)*, Oldenbourg Verlag, 1999, S.319-320.
- 38) 主として次を参照した。Wolfgang Schuchhardt, *Aus der Gründungszeit unserer Schule, a.a.O.*, Friederun Christa Karsch, *Drei Schulen feiern ihren 50. Geburtstag Marburg*, In: *Erziehungskunst*, Heft 10, 1995, F. C. Karsch, *Angaben zu Hans Schwedes* (2004年8月28日付、カールシュ女史から筆者宛書簡の添付文書)。
- 39) シューハルトの経歴及びA. ライヒヴァインとの関係については、主として次を参照した。Vera Jacobi, *Ansprache bei der Bestattung Dr. Wolfgang Schuchhardts*, In: *Mitteilungen der Freien Waldorfschule Marburg*, Nr.86, Herbst 1993, Wolfgang Schuchhardt, Lisa de Boor und die Freie Waldorfschule Marburg, *a.a.O.*, Klaus Schittko, Adolf Reichwein und Wolfgang Schuchhardt, In: *Reichwein Forum*, Nr.14.Oktober 2009.
- 40) Vera Jacobi, *a.a.O.*, S.54.
- 41) Amlung, U., *Adolf Reichwein 1898-1944. Ein Lebensbild des politischen Pädagogen, Volkskundlers und Widerstandskämpfers*, 1991, S. 140. 邦訳書(対馬達雄・佐藤史浩訳)『反ナチ抵抗の教育者—ライヒヴァイン 1898-1944—』昭和堂、1996年、112頁。
- 42) 次を参照のこと。対馬達雄『ナチズム・抵抗運動・戦後教育—「過去の克服」の原風景』昭和堂、2006年、同「アドルフ・ライヒヴァインとティーフェンゼー農村学校—ナチス体制下の教育的抵抗—」、『思想』第833号(1993年)。
- 43) Amlung, U., *a.a.O.*, S.397. 邦訳書、331頁。
- 44) Klaus Schittko, *a.a.O.*, S.6.
- 45) *Ibid.*, S.5-6. シューハルトは、この自らを含めた5人の会合に関して、1954年の時点で、「クライザウ・サークルの思想の小さな支部」だったと述べ、クライザウ・サークルとの関連性を指摘している。
- 46) *Ibid.*, S.4.
- 47) Wolfgang Schuchhardt, *Gründung und zehn Jahre Entwicklung unserer Schule, a.a.O.*, S.3.